

ワールドカップ 1988—国際会議の舞台裏—(9)

今野 浩 (中央大学)

17. 涵徳亭の夜

冷房が良く効いた建物の中で長時間過ごしたせいか、4日目が終わる頃には、冷え切った脚の下半分が痺れてきた。

その昔、“足が冷えても膝から下なら問題はない。しかし膝の上まで来たら命に関わる”という文章を読んだことがあるが、金曜の夕方になって不整脈が襲ってきたときには、急死したジェロスロー教授が呼んでいるような気がした。ここは家に帰って寝てしまいたいところだが、会長招宴が終わるまでは辛抱しなくてはならない。

涵徳亭に到着したときには、ほとんどの人は席に着いていた。若い人は1時間以上前に来て、2万坪の庭園を散策したということだ。彼らは「夜の椿山荘」と「夕方の後楽園」を、たっぷりエンジョイしたのである。

40人を収容できる宴会場は、身体が大きい外国人が30人も入ると手狭な感じは歪めない。机の上の天ぷらは萎れているが、アメリカ人は気にしないだろう。

参加した日本人は、伊理・刀根夫妻を含めて約10人。外国人の間では、実行委員会のパフォーマンスと、日本に対する羨望の言葉が溢れていた。

「日本はいい国だなあ」とオルデン教授。

「どこがいいのでしょうか」

「ストリート・ピープルがいないこと。オンボロ車が走っていないこと。安全なこと。それに公共交通網が充実していること」

1988年の日本は、バブル景気に沸いていた。代々木公園あたりには、野宿している浮浪者がいるということだったが、私の目に触れることはなかった。一方アメリカの大都市には、大勢の路上生活者がたむろしていた。

1年前に訪れたフィラデルフィアで、今にも雪が降り出しそうな寒空の下、議事堂前の階段部分にうずくまる、乳飲み子を抱えた4人家族のストリート・ピー

プルを見たときの衝撃は、今も忘れない。

オンボロ車が少ないのも確かだ。車検がないアメリカでは、10年以上の古車はザラである。1リッターで3キロしか走らない15年もののキャデラックが、堂々と走っているのである。

公共交通について言えば、東京の電車網は誠に良くできている。東京23区内に落下傘で飛び下りれば、歩いて15分以内に電車の駅があるというくらい、密な公共交通網がある。

1988年の東京は活気に溢れていた。前川レポートが内需拡大を謳ってから、21世紀初頭にはGDP800兆の日本が出現すると、エコノミストは喧伝した。

10年かそこらで、“もう1つの日本”が出現するのだから、どんどんお金を使いましょう——。地上げ、住宅価格の高騰、少子化などの問題はあっても、そんなものは大した問題ではない——。日本全体がバブルの波に浮かれていた。

今にして思えば、88年という年は、国際シンポジウムを開催するには、とても都合のいい年だった。3年前の85年であれば、不況の中で2,600万円もの寄付を集めることはできなかつただろう。また3年後の91年だったらと考えると、身の毛がよだつ。

もしMITの理事会が、85年8月でなく88年8月に開催されていたら、私は理事たちの要求……北米からの参加者全員の旅費半額負担は論外だが、役員全員とハンガリー人の旅費・滞在費負担などの要求を受け入れていたかもしれない。そのためには500万以上かかるが、企業は儲かっているから、そのくらいのお金ならどうにでもなる——。

ところが、89年の大納会で38,915円の史上最高値をつけた東京株式市場は、翌年1月から急降下が始まり、9月には2万1千円まで落ちてしまった。

業績悪化の中、企業は経費削減に努めた。このような状況の下では、1,000万円ですら集まったかどうか怪しい。一方旅費・滞在費補助は国際公約である。

かくして、シンポジウムが終わった時点で、実行委

員会は2千万近い赤字を抱えていたかもしれない。

一晩ゆっくり眠ったあと、不整脈は終息していた。そこで私は急ぎょダンツイク教授に会うことにした。間もなく75歳を迎える教授は、お元気そうには見えなかったが、本当はかなりお疲れのはずだ。

人間60歳を過ぎれば、いつ何が起こっても不思議はない。だから65歳を超える頃からは、教授にお目にかかるたびに、これが最後になるかもしれないと思いつけてきた。数年前に心臓バイパス手術を受けられてからは、その思いはますます強くなった。

空港までのお見送りは娘に任せることにしてあったが、帰国前にもう1度お会いして、お聞きしておきたいことがあったのだ。

ほかでもない。カーマーカーのことである。4年前の秋、スタンフォード大学で開催されたセミナーで、カーマーカーは舌禍事件を起こした。

数理科学のチャンピオンであるアロー教授が、「2度とカーマーカーの顔を見たくない」と吐き捨てたという大事件である。

しかしインド人のカーマーカーは、アメリカ英語のニュアンスが分からなかった可能性もある。かつてスタンフォードで、下宿先のマダムが次々と発する質問にたじたと化した友人のM氏が、「You are a maniac」とやってしまったことがある。

「あなたは日本マニアですね」と軽く言ったつもりだが、アメリカでmaniacとは「狂人」のことである。「激怒」したマダムは私を別室に呼び、「すぐに帰ってもらって!」と絶叫した。

アロー、ダンツイク両教授が、カーマーカーの暴言に怒ったことは確かだ。しかしそれはM氏の“maniac発言”だった可能性もある。いずれにせよ、ダンツイク教授はそれだけの理由で、カーマーカーへの「ダンツイク賞」授賞を拒否したとは思えない。

「カーマーカー特許について、どうお考えですか」

「数理計画法が発展したのは、すべての人が、他人のアイデアを自由に利用することができたからだ。もし私が単体法に特許を請求していたら、どうなっていたらろう。私は大金持ちになったかもしれないが、数理計画法はここまで発展しなかったらろう」

「私もそう思います」

「昨日のパーティーで、スティーブ・ロビンソンを中心に、この問題について検討する委員会を作ることが決まった。私も委員になってくれと頼まれたので、引き受けることにした」

ウィスコンシン大学のロビンソン教授は、“アメリカの良心”と呼ぶべき人格者である。

「私はカーマーカーが嫌いだ。しかしそれは彼が礼儀を弁えないとか、単体法を負かしたといったことが理由ではない。数理計画法の世界に、特許を持ち込んだことが許せないのだ。アメリカは、レーガン政権になってから、カネ・カネ・カネの世界になってしまった。

私はアメリカが、弁護士社会になってしまったことを憂慮している。あんな奴らは全員ロケットに乗せて、宇宙に放り出してやればいい。私は日本がアメリカのように、数学を特許にするような国にならないことを願っている」

これは私にとって、ダンツイク教授の遺言ともいえるべき重いメッセージだった。

18. あのバッグはどこに行ってしまったのでしょうか

あれから20年、4人の師のうちの2人、森口教授とダンツイク教授は、2004年、2005年に相次いで亡くなった。80の大台を超えたバラス教授とトイ教授も、すでに第一線を引退した。

また数理科学の世界に革命と大騒動を引き起こしたカーマーカーは、40代半ばにインドに戻り、透明人間になった。順調に行っていれば、数理計画法のリーダーになるだけの才能を持っていただけに、惜しいことをしたものである。

カーマーカー特許は、アメリカでは66件の異議申し立てと、91年にロビンソン教授が委員長を務める「アルゴリズムと法律に関する委員会」が発表した、説得力に満ちた提言をものともせず、20年にわたって生き続け、2005年に天寿を全うした。

しかしこの特許は、ベル研とカーマーカーに金銭的な報酬ではなく、不名誉をもたらして終わった。

私はダンツイク教授の遺言に従い、15年にわたってカーマーカー特許と戦い、2002年には3年の寿命を残して無効化することに成功したものの、数学/アルゴリズム特許の日本侵入を防ぐことはできなかった。残念なことではあるが、AT & Tや法曹界と事を構えて抹殺されることなく、70歳まで生き延びたのは、幸運だったというべきだろう。

ノーベル賞に輝いた江崎玲於奈博士は、“人間の独創性は20歳でピークを迎え、70歳でゼロになる”と言っている。80歳まで独創性を維持したバラス、ト

イ教授のような人もいるが、それは戦争によるブランクを取り戻そうという意思の力に支えられていたからである。

世間では、研究者という生き物は、「真理の発見のため」、「人間の進歩と福祉」のために研究していると思っ

ている人が多いかもしれない。ダンツイク、バラス教授はそういう人である。

しかし研究者の中には、単に“面白いから”とか、“研究者の地位と研究費を獲得するため”といった、次元の低い動機に後押しされている人も多いというのが、私の観察結果である。

では私の動機は何だったのか。“誰も解いていない重要な問題をうまく解きたい”という高邁な動機が3分の1，“研究者としてのステータスを維持したい（透明人間にはなりたくない）”が3分の1，そして残りの3分の1が，“ライバルに負けたくない”である。

ところが70歳になったいま、私はこの動機付けのほとんどすべてを失ってしまった。こうなったら、研究者としてのステータスを維持するのは難しい。

かくして私は、1年後に迫った2回目の（そして最後の）定年を前にして、研究室の整理に取り掛かった。大量の“不良資産”の中で、最も大きなスペースを占拠しているのは、私が編集に関わった数々のジャーナルである。

1991年に創刊された「Journal of Global Optimization」の編集委員になって以来、あちこちのジャーナルから編集委員就任の依頼が舞い込んだ。“頼まれたことは断らない”がモットーのエンジニアは、ピーク時には9つの専門誌の編集委員を務めた。

これらのジャーナルは、年4冊から6冊、多いものは8冊の雑誌を発行する。私は毎年それらを製本して本棚に並べていった。

東工大を退職するとき、創刊以来全巻を揃えた2つのジャーナルを後輩に寄贈して、少々身軽になった。しかしその9年後、書棚は増殖するジャーナルで溢れ返った。

10年前であれば、これらのジャーナルは、古本屋がしかるべき価格で買い取ってくれたはずだ。7種類のジャーナルが創刊号から揃っているとすれば、少なくとも200万円にはなっただろう。

ところがここ数年の間に、ほとんどのジャーナルは電子化され、10ドル程度を支払えば、インターネットから論文をダウンロードできるようになった。誠に便利な時代になったものだが、その一方でかつての貴

重な資産は、200巻のベータ式ビデオテープ同様、完全な場所塞ぎになったのである。

そこで私は、300冊余りのジャーナルを、資源ゴミとして処分した。総重量は1トン、製本にかけたお金だけでも100万円を超える。

余勢をかって、私はファイル棚の整理に取り掛かった。そこで出てきたのが、「ワールドカップ'88」というラベルがついたファイルである。ウォルフ、ダンツイク、オルデン、バリンスキー教授らの手紙、ダンツイク教授の訪日スケジュール表、シンポジウムのパンフレット、実行委員会の業務計画表、募金リスト、参加者名簿などなど。

なぜこのような古い書類を残しておいたのか？ それはいつの日にか、再び日本で国際シンポジウムが開催される日が来るかもしれない、と考えたためである。

古いファイルを前にして、様々な記憶が甦ってきた。参加者数は、当初の計画には届かなかったが、西側世界のスター研究者はほとんどすべて、そして東側からも何人かの有力研究者が来てくれた。

このシンポジウムを機に、国際的に活躍していた研究者はもちろん、ワールドカップを（無料）観戦し、椿山荘で（無銭）飲食した人の中から、1ダース以上の有力研究者が輩出し、日本は90年代に入って世界第2の地位を固めた。

「ワールドカップ'88」は多くの人の記憶に残った。1991年のアムステルダム、94年のアンアーバー、97年のローザンヌ大会でも、多くの人が東京大会を懐かしむ言葉を発した。

97年のローザンヌ大会は、線形計画法誕生50周年を祝う、歴史的シンポジウムだった。1975年のノーベル経済学賞が、線形計画法における業績を対象に贈られたとき、最大の功労者であるダンツイク教授が、選考から漏れたことに衝撃を受けた数理計画法コミュニティは、四半世紀を経てそのショックから立ち直っていた。

カーマーカー法を改良した小島教授グループの主・双対内点法と、ダンツイクの単体法と組み合わせて作られたソフトウェアは、10年前には絶対に解けないと思われていた問題を解くことに成功した。

数理計画法は、線形計画法誕生50年目にして、「最適化の時代」の旗手としての地位を確立した。いまさら（評判の悪い）ノーベル経済学賞など気にすることはない。

ダンツイク教授は、足元にやや不安感を漂わせてい

たが、1,300人の息子・孫たちに囲まれて、とても幸せそうに見えた。

ところが、2000年のアトランタ大会に出席した私は、このシンポジウムとの付き合いは、これが最後になるのではないかという予感を抱いた。

なぜそう思ったのか。まず、開会式でのジョージ・ネムハウザー実行委員長長の挑発的な演説。ついでダンツイク賞、ファルカーソン賞、タッカー賞、オーチャード・ヘイズ賞などすべての賞が、一部のグループに独占されたこと。

ネムハウザー委員長は、優秀な人を選んだらたまたまこのような結果になった、と言うかもしれない。しかし誰が見ても、この選考には偏りがあった。ランチを共にした（ベトナム人の）H. トイ教授、（ギリシャ人の）P. パルダロス教授、（ドイツ人の）S. シャイブレ教授も、同じことを口にしていた。

2つ目の理由は、世界ナンバーツーの実力を持った日本人が、数理計画法学会の役員人事からも、旗艦ジャーナルの編集委員からも排除されているような気がしたことである（これまた私の僻みだろうか）。

3つ目の理由は、エリス・ジョンソン教授に抱えられるようにして会場に姿を現した、86歳のダンツイク教授が、3年後のコペンハーゲン大会には参加できそうもないように見えたことである。

数理計画法の世界には優秀な若手がひしめき、ロートルはついていけない議論が多くなった。数学理論はますます高度化し、私のような研究者の活動の場所は狭まってきた。

私はもっと比較優位を持つ、身の丈に合った分野で勝負した方がいいのではないか――。

こうして2000年を境に、私は数理計画法の研究から金融工学（数理計画法の応用としての資産運用理論と信用リスク計量理論）にウェイトを移した。

金融工学の世界には、多くの数学者や物理学者が参入しているが、彼らは数理計画法を知らない。サミュエルソンやアローの時代と違って、経済学者の中にも数理計画法に通じている人は少なくなった。この結果

私は、数理計画法の知識を利用して、この世界での比較優位を手に入れることができた。

日本は90年代はじめから、世界第2のパワーを誇った。しかしそこでリーダー役を務めたプレーヤーの中には、すでに事実上引退した人も少なくない。実行委員を務めてくれた（当時の）若手は今も頑張っているが、彼らもすでに熟年と呼ばれる年齢を迎えた。

あとを引継ぐ世代には、優秀な人が揃っているが、果たして彼らはユダヤ人やギリシャ人、そして大挙して押し寄せる中国人と戦って、これまでの地位を維持してくれるだろうか。

ワールドカップ1988は、遠い昔となった。あの子の痕跡を残すものは、目の前にある古いファイルと、登録者全員に配られた手提げバックだけになってしまった。

やっこ凧のロゴマークがついたバッグは、参加者の間で大好評だった。91年のアムステルダム大会、94年のミシガン大会、そして97年のローザンヌ大会でも、このバックを手にした人を何人も見かけた。

東京大会に参加した人達は、会場で配られたエコバッグ風手提げ袋ではなく、やっこ凧バッグを使ってくれたのだ。

また20世紀が終わる頃、ロサンゼルス空港で、若いビジネスマンがこのバックを持っているのを見かけたので、声をかけたところ、「数年前に亡くなった父が使っていたものをもらい受けた」と言っていた。

私自身も実行委員の役得で、このバッグを3つ手に入れ、セカンド・サード・フォース・バッグとして愛用していた。

ところが汚れが目立つようになったので、2000年を超える頃、持ち歩くのを自粛するようになった。そして一番汚れたものを廃棄して、残りの2つをどこかにしまった。ところが2011年の今、探してみてもどこにも見当たらない。

「ワールドカップ1988」の記憶は、あのバッグとともに消え去るのだろうか。